

テーマは自然との共生である。本誌Vol.9で琵琶湖ホテルの、里山環境を守る取り組みを紹介した。今回は、その続編として、株式会社 叶 匠寿庵の「寿長生の郷」(すないのさと)と大津市南比良で活動する一般社団法人比良里山クラブの取り組みを紹介する。

## キーワードは農工ひとつ

寿長生の郷の活動を、叶 匠寿庵の秘書広報室の高橋里佳氏にお話を聞いた。叶 匠寿庵は、昭和33年に芝田清次氏により大津で創立された和菓子製造販売会社である。寿長生の郷は、昭和60年に二代目芝田清邦氏の構想により、お菓子の原料を社員自らが育てる場として造営された。同郷には、本社家屋と工場、食事処、茶室などがあり、敷地6万3千坪の大半が農地である。梅を中心に栽培しており、実を取るための城州白梅を栽培している。庭には四季折々の自然の花が咲いており、お客様に楽しんでもらうことはもちろん、従業員も四季を感じながら和菓子作りのできる空間となっていて、すばらしい。

郷内では、昔ながらの里山文化に倣い、大石龍門又ヶ谷の渓流の水を工場用水として利用している。工場で利用した水は、浄化施設で浄化してから排水する。小豆を漉し餡にした際に出る皮は、堆肥にして再利用するなど、現代のテクノロジーを使いつつ自然と共生するためのサイクルを構築している。寿長生



寿長生の郷の外観

の郷は、大石地区から土地を借りて事業を行っているという意識で取り組んでおり、地域の人々との関わりを大切に、水路や田畑を守る活動、祭りなどの行事に参加している。今後は、SDGs(持続可能な開発目標)に力を入れ、同社が取り組んできた活動が、どの程度効果があるものなのかを検証していきたいという。キーワードは自然の「農」、人の手の「工」で生み出す「農工ひとつ」だ。



高橋里佳さん(中央)と本社前にて

## 野生動物との共生をめざして

比良里山クラブでは、代表の三浦美香さんにお話を伺った。比良里山クラブは、2003年に有志が集まり、比良地域の里山保全を行う任意団体として始まった。2009年に一般社団法人を設立、里山整備のほか、赤紫蘇栽培、子供の環境学習を行っている。

中でも赤紫蘇事業は耕作放棄されがちな山際の農地を活用するために、課題である獣害をどうするか試行錯誤した結果、赤紫蘇が獣害に遭いにくいという事が分かり、野生動物と共生するために、境界線として赤紫蘇を植え、そこから里山の保全活動が広がった。「猪や鹿を敵対視」するのではなく「害獣たちとの共生」という姿勢



代表の三浦さん



取材中の様子



◀ 寿長生の郷の城州白梅

に強く心惹かれた。沢山採れた赤紫蘇をどう活用するかを思索した末、メーカーの協力を得て「比良ペリラ」というジュースが完成した。深く赤いルビーの輝きにも似た美しい色の「比良ペリラ」は美味しくて、しかも体にも良いということが評判になり、商品が持つ美(魅)力から近年は海外からの注文もあるという。栽培は地域のボランティアに支えられている。1時間以上かけて作業に来る高齢者がいたり、引きこもりや不登校の状況がかえる親子の参加もあるという。



赤紫蘇の収穫(左)と比良ペリラ(右)

取材後記

## 農工来福(のうこうらいふく)

寿長生の郷では、「農工ひとつ」の理念のもと、従業員の皆さんが自らお菓子の原料を育てることで、愛情のこもったお菓子が生まれるのだと思った。比良里山クラブのお話では「農福連携」というキーワードが出た。里山保全に様々な人がかかわり、その結果、人々に喜ばれる製品ができることは素晴らしいと思った。自然とどう向き合っていくかという問題について、これからも考えていきたい。

滋賀短期大学ビジネスコミュニケーション学科  
1回生 井上舞子 2回生 大村麻弥 市村唯